

「鬼貫句選」や「俳諧七車」などを読んで先づ感ずるのは彼の一種独特の句法である。其句法の中で茲にいふ重語の如きは最も注目に値するものと思はれる。

重語の性質や効用や又は他の作者の作例については別に此処に陳べないが、鬼貫の手腕如何に到りては下に掲ぐる用例で多少悟つて貰ひ度いのである。

さわゝと蓮動かす池の龜

ひつゝと風は空行く冬牡丹

つくゝと物の始まる火燵かな

愚痴々々と獨に更る月見かな

しみゝと立て見にけり今日の月

茫々ととりみだしたる薄かな

ひらゝと木の葉つごきて秋ぞ立

しよるゝと常は流るゝ大井川

神々と春日茂りてつゝら山

おほろゝ燈見るや淀の橋

雪よゝきのふ忘れし年の花

國々を秋になつたら見にまはれ

日よ月よ千代の轍の初車

そのそこにおのれを梅に鳥とは

富士は雪は花一時のよしの山

月よけふよ去年の命に花ぞ咲く

野も山も晝かとぞ首のたるくこそ

耳に目にあふがぬ風のかをり哉

以上は上五の中に用ゐたのである。

ほんのりとほのや元日なりにけり

去年も咲き今年も咲くや櫻の木

それは又それはさへづる鳥の聲

白くても白き味なし眞桑瓜

ふぐと程鰻のやうなるものはなし

雪に笑ひ雨にも笑ふむかしかな

物すこやあら面白や帰り花

油さしゝつゝ寝ぬ夜かな

昔やら今やらつゝ秋のくれ

人に遁げ人に馴るゝや雀の子

ありのみのありとは梨の花香哉

あす満ちてあすかける月の今日こそな

そちへ吹かばこちらへ吹かば秋の風

喰て行きや喰てゆかしませ五加木飯

朝も秋ゆうべも秋の暑さかな
六日八日中に七日の齋かな

以上は上五七の間に用ゐたのである。

惜しめども窟たら起きたら春である

此の雪が降うと師走まで

寝られぬやにがしくも鳴千鳥

君もさぞ空をどこらを此ゆうべ

心あての花でよしので餘をばなほ

雲横に去年の今年の花や空

明やすの此ほのや烏帽子顔

橘は其日ゝをむかしかな

年木せめて奥のおく山馬の聲

以上は中七の中に用ゐたのである。

今まの心是れこそ秋の秋の月

此露を待て寝たぞや起きたぞや

初秋のどれが露やら雨の露

六月や白を乾さうぞつき白を

春の雨降るにも思ふ思はれよう

うつらふや陽の花に陰の花

草麥や雲雀があがるあれ下がる

梅をやる心もおのれ鼻もおのれ

以上は七と下五の間に用ゐたのである。

月をとて漸く雲のちぎれ

これは下五。

月も雪も何が残ふ花も筆に

後の月雨の降る時けふの月

これは上五と下五。

咲くからに見るからに花の散るからに

これは五七五に通じて居る。

以上にあげたのは十七字中に一組の重語を用ゐた例である。使用例の多少は兎に角として、一組だけの重語は他の作者にも珍らしくはないが、次に挙げるのに到つては二組以上の重語が使つてある。これが先づ他の作者にあまり沢山見えぬ所であるのだ。

またもまた花に散られてうつら

花を雪に見たる法師や雪の花

これは上五と下五に二組。

うつゝな夜とは秋とは今ぞ嘸ぞ

夏草の根も葉もどちへどふありと

夏衣着たら着たらもかねかねぞ

これは七と下五の間に二組。

しよぼしよぼに降るなら月を月をとも

木も草も世界皆花月の花

これは上五に一組、七五に一組。

来いと云ふ時には来いでおついおゝ

現なや現なの月袖に袖に

北へ出れば東へ出れば花のなんの

これ等は五七に一組、下五に一組。

白魚や目まで白魚目は黒魚

此句では魚が三つ、白字が二つ、目字が二つ。

袖に玉七つの六つの鐘に露

これでは袖七鐘に對して玉六露即ち三組の重語である。尚此外に

雪で富士か富士にて雪か富士の雪

と云ふのがある。

まづこんなものである。そこで鬼貫が何故に此の如き奇妙な句法を得意に使用したかは疑問であるが、恐らくは「其奥に至りては色もなく香りもなきをこそ得たる所といふなるべし」「娑言葉にかゝはらぬこそ好ましけれ」と云ふ彼の主義に基くのであらう。併し彼が八歳の時始めて作つたといふのが即

来いゝと云へど螢が飛んで行く

の一句であるのを見れば、重語法は殆んど鬼貫の生得の技であつたかも知れぬ。

序に短歌に於ける彼の重語を紹介しよう。

水をわりて見たれば中に花もなく

されども木より花はさきぬる

ひとり立つ我俳諧を觀ずれば

上手でもなし下手にてもなし